平仮名附
挿繪入

往生要集

上

特258
119

始

惠心僧都著述

平かな附
挿繪入

地獄
六道
極樂

往生要集

全部
三册

下關市大字豊浦町金屋　正林堂書房版

序

生者必滅會者定離と云ひ善因善果惡因惡果と云ふ並に古人の金言なり余の家寶たる挿繪入往生要集は寛文十一年の元板にして祖先が購めたる處天下稀有の寶書と謂ふべく人之を得んと欲するも已に他の存する所に非ず故に知人に圖り其贊助を得將に以て再版に付せんとす此書蓋し惠心僧都即ち源信和尚の撰なり然り而して現代人の思想に合はぬと云ふものあり動もすれば地獄も極樂も無き者なりと唱ふるものあり余今敢て之れが爲めに喋々するを欲せすと雖も善因善果を生じ惡因惡果を結ぶは理

自ら然りと信ず此の故に惠心僧都の遺教を遵奉し新に本書を再版し讀み易く解し易く悟り易く而かも安價にて頒布することゝせり希くば一部を枕邊に備へ讀書百扁自ら悟るの諺もあり急ぎ信を得られん事相伴ひて思想善導の一助ともなれば余の本望何んぞ之れに過ん茲に聊か禿筆を弄して序となす

昭和十四年十月

林照之進

略語往生要集

横川法語（源信和尚）撰

夫れ一切の衆生三惡道を免れて人間に生れたる事大きなる喜びなり身わ賤くとも蓄生に劣らんや家は貧くとも餓鬼にわ勝るべし思ふ事叶わずとも地獄の苦にわ比ぶべからず世の濟み浮きわ厭ふ便りなり人數ならぬ身の賤しきわ菩提を願ふしるべなり此の故に人間に生れたる事喜ぶべし信心淺けれ共本願の深きが故に信めば必ず

往生す念佛ものうれ共稱ふればくどく莫大なり
此の故に本願に合ふ事喜ぶべし妄念は凡夫の地
体なり妄念の外に別に凡夫の心は無なり臨終
のとき迄わ一行に妄念の凡夫にてありけるぞと
心得て念佛すれば來向に預つて蓮臺に上る時こ
そ妄念を飜して悟の心とはなるなり妄念の中よ
り申し出したる念佛は濁に染まぬ蓮の如くにて
決定往生疑なし

附記者藏版人　林照之進

往生要集之由來

一往生要集の繪は後村上天皇の御代に往生要集經文を献上なし
たるに之れを繪になし判り易く見せよとの詔を受け源信和尚
之を筆にして奉りき陛下御嘉納あらせられ御安室に掛けさせ
られたるに夜毎に罪人の苦しみ聲にて御安眠を防げ終に御下
戻になり江州阪本の來向寺の寶物となり現今は國寶になり居
れりと聞く之を源本として繪入往生要集を發行したるものな
りと云ふ

附記者藏版人　林照之進

恵心僧都御像

僧都の詠歌

極樂を願ふ思ひのけふりこそ
むかへの雲とやがてなるらめ

夜もすがら佛の道をもとむれば
わが心こそ尋いりぬれ

悟り得て思ひとく日にあいぬれば
はどなく消へぬ罪のあは雪

目錄

上之卷

大文獸離穢土之事

第一　等活地獄の事
第二　黑繩地獄の事
第三　衆合地獄の事
第四　叫喚地獄の事
第五　大叫喚地獄の事
第六　焦熱地獄の事
第七　大焦熱地獄の事
第八　阿鼻地獄の事

中之巻

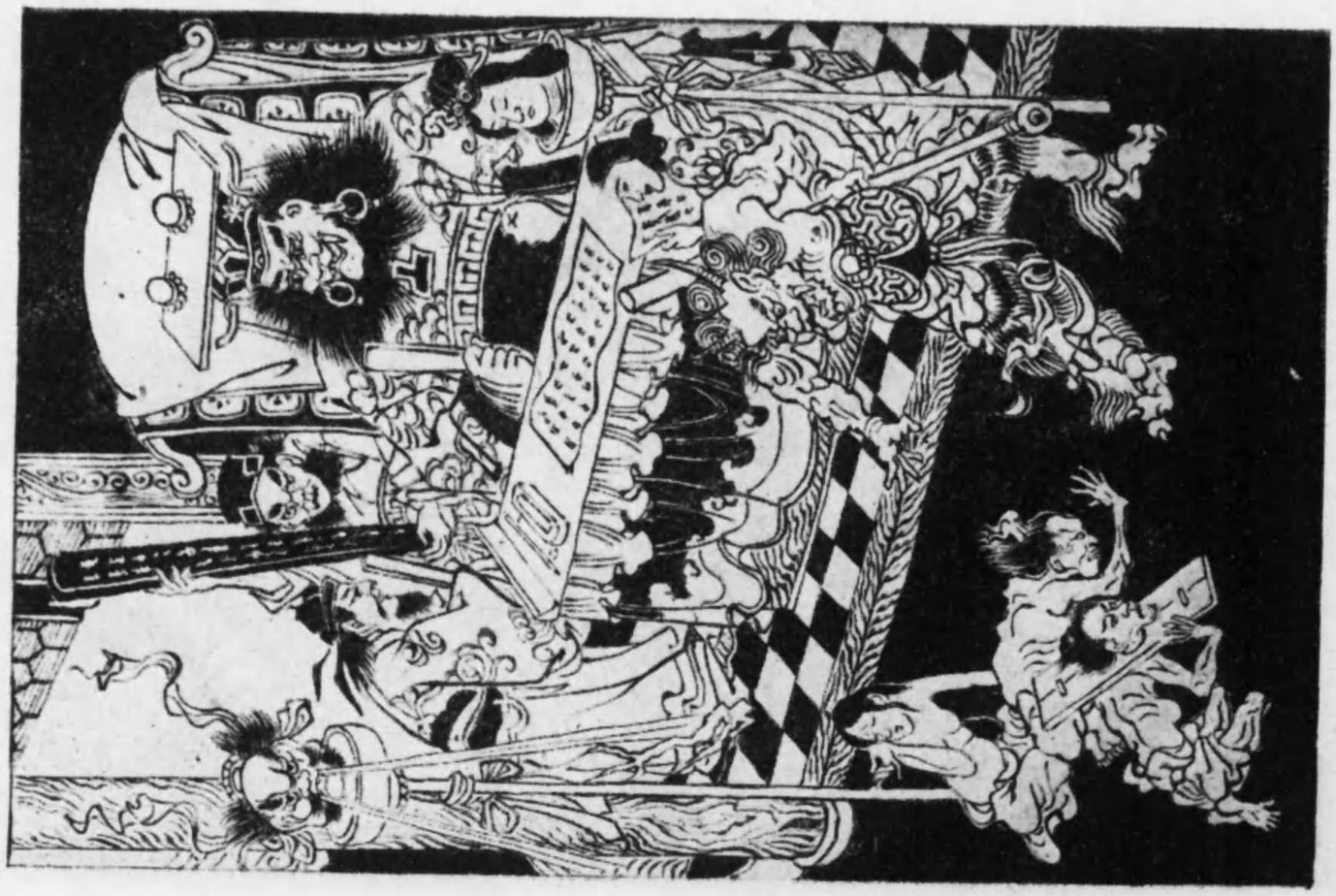
第一　餓鬼道の事
第二　畜生道の事
第三　修羅道の事
第四　人道の事
第五　天道の事
第六　六道の猒相を結ぶ事

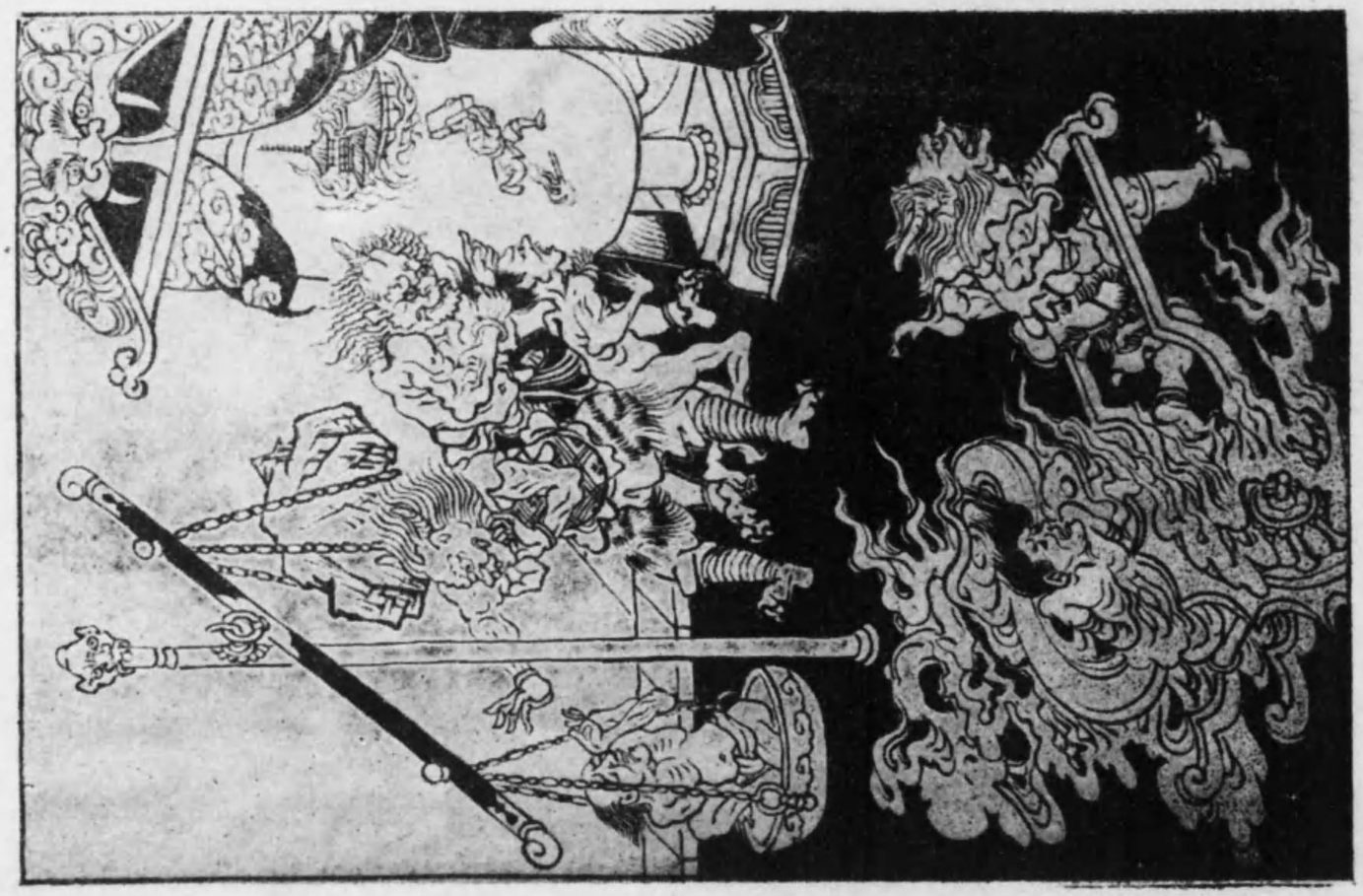
下之巻

第一　聖衆來迎樂の事
第二　蓮花初開樂の事
第三　身相神通樂の事
第四　五妙境界樂の事
第五　快樂無退樂の事
第六　引接結緣樂の事
第七　聖衆俱會樂の事
第八　見佛問法樂の事
第九　隨心供佛樂の事
第十　增進佛道樂の事

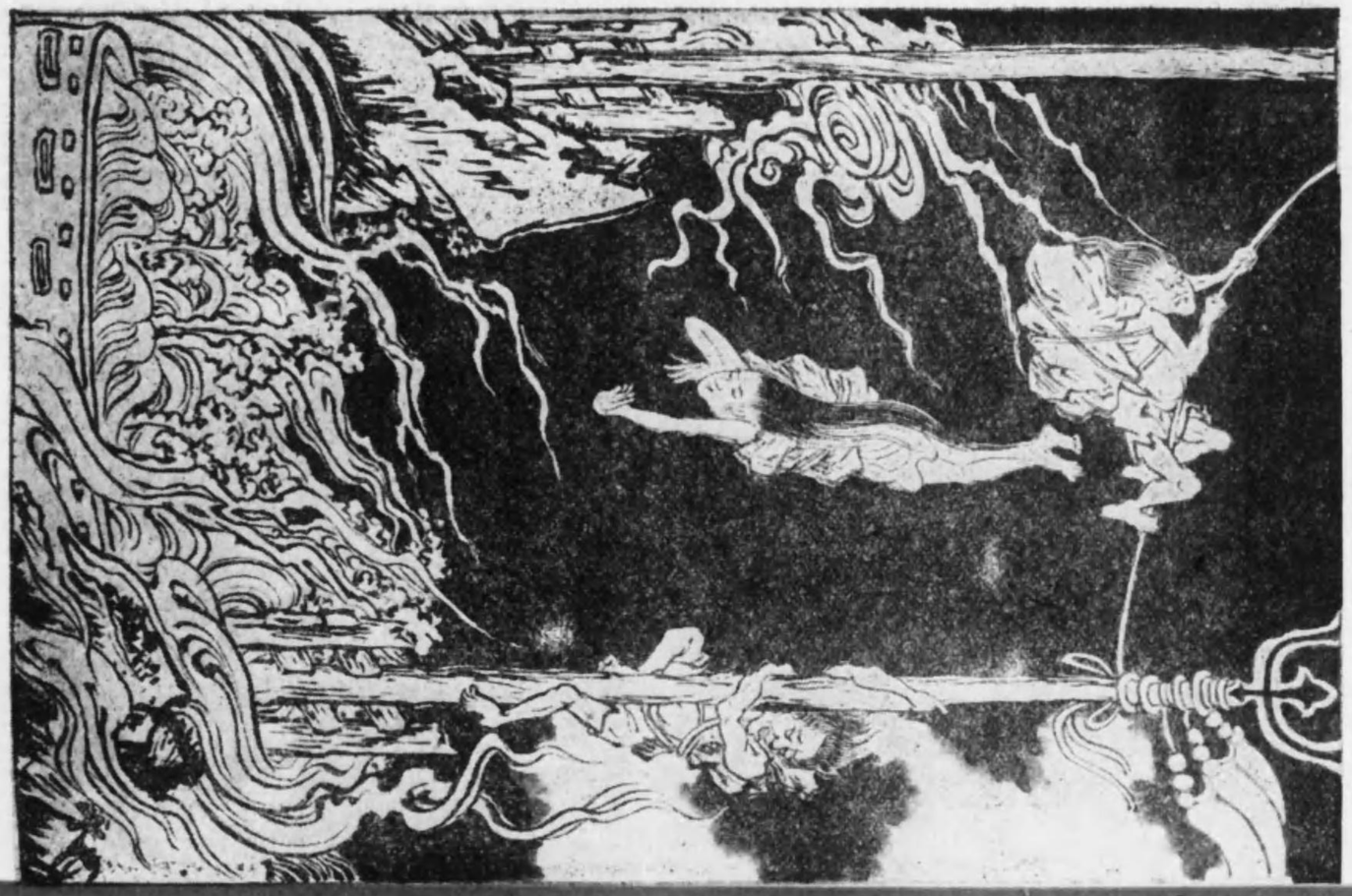
目錄終

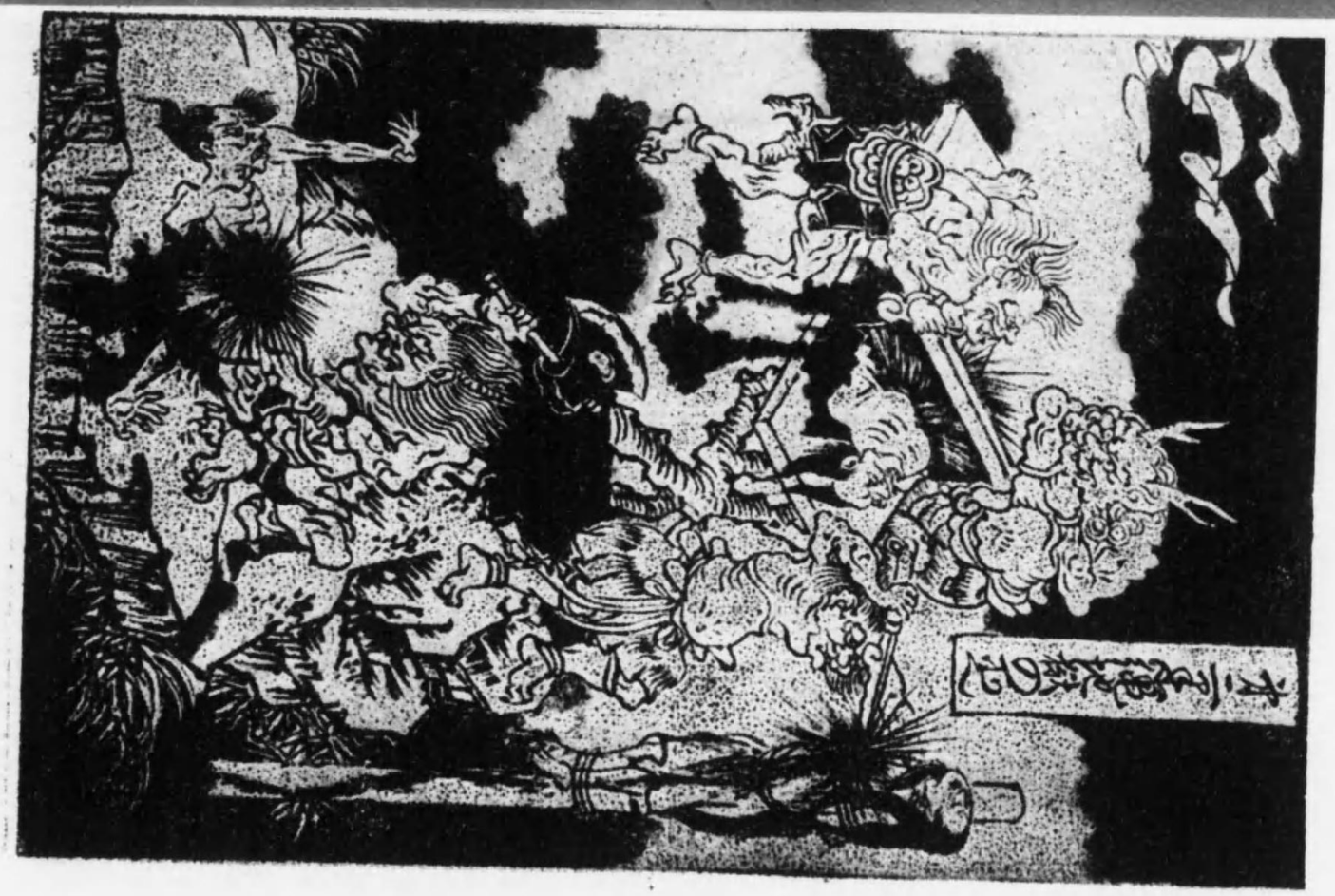
閻魔王廳前之圖





第一 等活地獄の苦

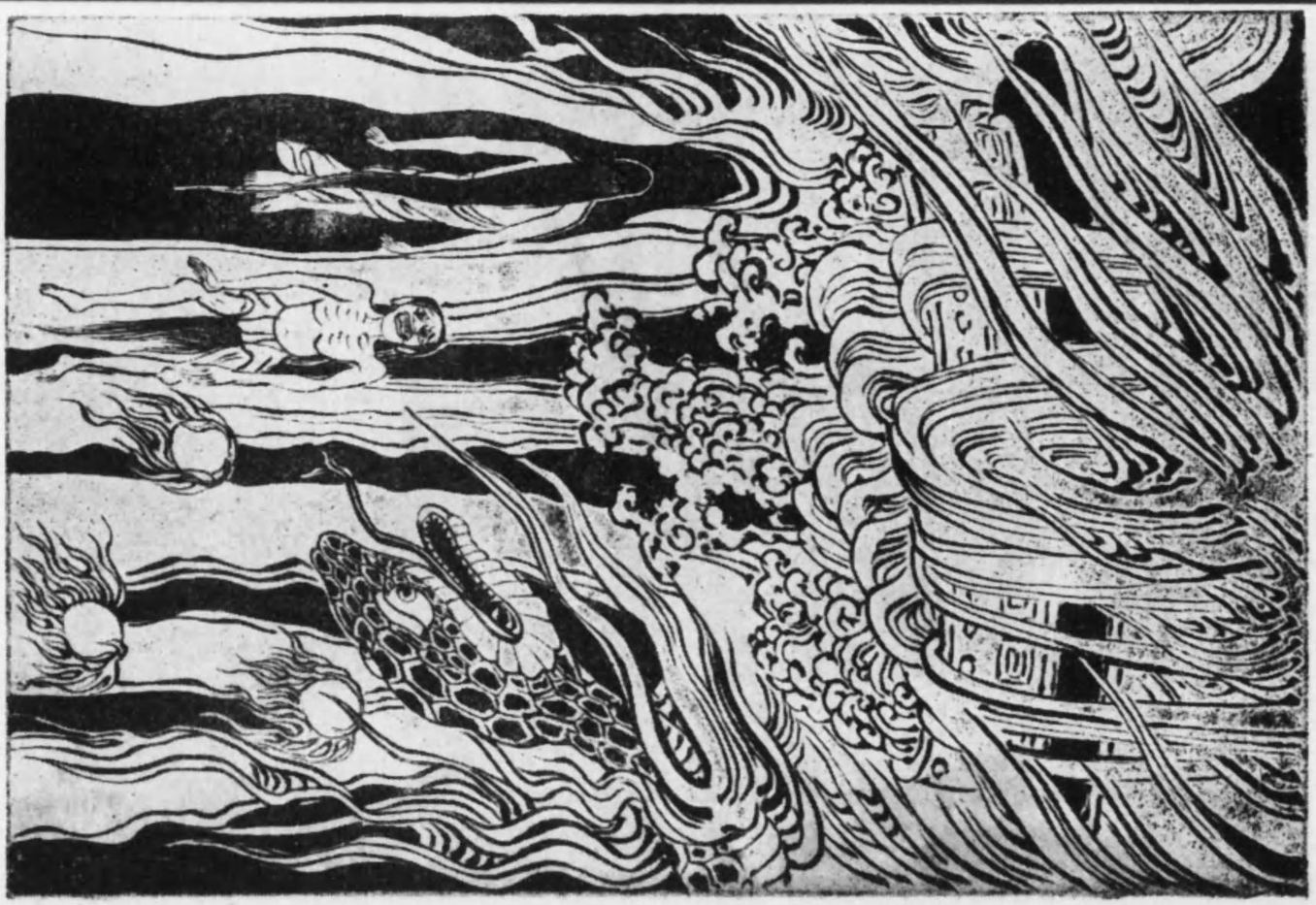




才三元合地獄の図

才六集惡地獄のおん

閻少郎
分業雜色



往生要集序

其れ極樂じよ土に往生を遂て成佛する修業の安き道を教へ給ふみのりは濁世末代のもの〻爲に例へば目ありてものを見足ありて行くが如く斯ありがたき教へなれば僧俗男女貴きも賤しきも智あるも愚なるも誰か心を極めて此の道に入らざらんやたゞし賢密の教法其の經文ひろく事理の業因其修業又多し利根上智にしてくわしく進み安き人はいまたいたりかたき道とせざらんわが如くなる愚かに拙なきものあきらめ難き理をさとり行し難き道を遂げ侍らんや此の故に念佛の一門におもひより安心決

定して聊か經論の中の肝要の文を集めて書き連られ待りて常に之れを聞き見て修するにさとり安く行し安し凡て十門あり之れを二つに分ける一つには厭離穢土二つには欣求淨土三つには極樂の證據四つには正修念佛五つには助念の方法六つには別時念佛七つには念佛の利益八つには念佛の證據九つには往生の諸業十には問答料けんなり之れを座の右に置きて忘れすたりなん備へとして侍る

天台首楞嚴院沙門源信撰

往生要集卷之上　地獄物語

第一　厭離穢土の事

其れ厭離穢土と云ふはけがらわしき土を云ひ離るゝ事なり此娑婆世界を初め六道こゝ〳〵く穢土也。都て是を三界と云へり三界は安き事なし猶火宅のごとしと佛說き給ふて火の中を宅として居たるが如しと也尤も厭離すべき者也今其厭離の相をあかす惣じて七種あり。一つには地獄二には餓鬼三つには畜生四つには阿修羅五つには人間六つには天人七つには惣結なり第一に地獄に又分て八つあり一つには等活二つには黑繩三つには衆合四つには叫喚五つには大叫喚六つには焦熱七つには大焦熱八つには無間也。

第一　等活地獄の事

一つに等活地獄と云ふは此閻浮提の下一千由旬にありたて横一万由旬なり此中の罪人互に常に害心をいたきて若したま〳〵逢ひ見れば獵人の鹿にあへるが如し各の黒金子の爪をとぎたてゝ互に眼をつかみしゝむらを引さき血流れしゝむら盡きて只骨ばかりのこる或は獄卒ども黒金生の棒を以て頭より足迄あまねく打ひしきて身体破れくだくる事砂の如しあるひは極めて利刀にて分々に肉を切りさく事厨者の魚肉を切るが如し然るに涼しき風吹き來ればよみがへりて本の形となり又たちまちに前の如く苦を受くなり或は虚空に聲有てもろ〳〵の有情還て等活すべしと云ひ或は獄卒黒金子のさすまたを以て地を打て活々と唱ゆると云ふ人間の五十年を四天王天の一日一夜として其壽命五百歳也四天王天の壽命を此地獄の一日一夜として壽命五百歳也殺生したる者此地獄に落つるなり。又此地獄の四方の門の外に眷属の別所にて十六の地獄あり一つには屎泥所と云ふ此地獄には極めて熱き糞と泥とあり其の味甚だにがくして金剛のくちばし有る虫其中に充滿せり罪人ども中に居て此熱き糞を食とす諸ろ〳〵の虫集りて此罪人を一時に競ひ食ふて皮を破りしゝむらをはみ骨を食ぶり髓をすふ昔鹿を殺し鳥を殺したるもの此地獄に落る也。二つには刀輪所と云ふ此地獄には黒金子の壁迴りかこみて其高さ十由旬なり猛火盛んにして常に其の中にみちたり人間の火は之れに比ぶれば雪の如し此猛火は僅かに身にふるれば芥子の如くにくだくるなり又熱鉄のまるがせを降らする事車軸の雨の

如し又つるぎの林有其の刃の利たる事は髪すぢ卯の毛をふきかけてもたまらすして微塵になる況んや、罪人の身をや又つるぎを降らす事虚空より大瀧の落るに似たりかくのごとく諸々の苦現まじわり來て耐へ忍ふべからず昔ものを貪り殺生したるもの此地獄に落つる也。三つには禽熱所と云ふ此地獄は罪人を捕へて黑金子禽の中にいれて是を煑じ煮る事豆の如しむかし殺生して煑て食したるもの此地獄に落つる也四つには多苦所と云ふ此地獄は十千億種の無量の楚毒あり具に說くべからず昔繩を以て人を縛り杖を以て人を打人をかりて遠き道に行かしめ礼しき所より人を落し煙をふすべて人をなやまし小兒を怖からしめ此外是等の如き種々に人をなやませたるもの皆此地獄に落つるなり五つには闇冥所と云ふ此地獄の罪人は黑闇の所に居て常に闇火に燒き焦がさる又大力の猛風吹いて金剛山の山と山とを吹き合い〳〵て身をすりくだく事砂をちらす如し又熱風に吹かるゝ事利刀にて切割如し昔大火炎にて羊の口鼻をふさぎ、二つの博の中に亀を置きて押殺したるもの此地獄に落る也六つには不喜所と云ふ。此地獄には大火炎あつて晝夜身を燒もやす又熟炎の口ばし有鳥犬狐其聲極めて惡しくして身の毛よだち恐しく、常に來りて食ふて骨肉狼ぜきこみだりなり金剛の口ばしある虫骨の中に往來して髓を食へり。昔貝を吹き太鼓を打ち恐るべき聲をなして鳥けだものを殺したるもの此地獄に落つるなり七つには極苦所と云ふ礼しき岸の元にあつて常に黑金子の火に燒きくがさる昔ほしいまゝにして殺生したるもの此地獄に落つる也

巳上正法念經にありのこりて九つは經の中によす是になぞらへ知るべし

第二　黑繩地獄の事

二つには黑繩地獄と云ふは等活地獄の下に有り、堅横廣さ前に同ド獄卒罪人をとらへて熱鉄の地に打ち戻せて熱鐵の繩を以て堅横に墨うちして熱鉄の斧を以て、墨打の繩に從ひて切りさき、或は鋸にて引切り或は刀を以て腹わたをゑぐり出し百千段に切て、今處彼處にちらしをく、又或は數もなく熱鐵の繩をかけて交へ横たへ其中へ罪人を追ひ入れば惡風あらく吹て熱鐵の繩身にまつはり付肉を燒き骨を焦す又右左に大きなる黑金子の山あり山の上に黑金子の幢をし立て其先に黑金子の繩をつけて兩方の山へはり渡し、其繩の下に大釜をあまたすへならべぐらくと煮へかへつて湯玉高くほとばしれり罪人に黑金子の山を負せて繩のうへを渡らしむなどかはをちざらめや、彼の大釜の中に落ちてくだけ煮らるゝ事極まりなく骨身も分らずとろける此地獄の苦みは等活地獄ならびに十六所の諸ろくの苦しみを十增倍重く受くるなり獄卒罪人を呵責して、曰く、心はこれ第一の怨也此の怨最も惡をつくりてよく人を縛り閻魔王のまへにをくりいたる汝われと地獄にやられ、吾と惡業に食はるゝ妻子兄弟親類眷族も救ふ事ならずと云へり後の五つの地獄までは其の地獄の前より苦を十增倍宛次第くに重く受くる事此地獄になぞらへて知るべし人間の百歲を忉利天の一日一夜として其壽命一千歲也、又忉利天の命を此地獄の一晝夜として命一千歲也。殺生偸盜の者此地獄に落る也、又異所の地獄あり等喚受苦所

と名づく。罪人を險しき高き事無量由旬の岸の上に上げ置きて熱炎の黑き繩にて鐵金に縛りつなぎ終りて後に岸の下は皆熱地にして利刀草むらの如くに立つる處へ突き落す黑金子の炎の牙ある狗これを喰ふ一身皆分々にはなれちる聲を上げて叫喚ともたすくるものなし。昔法を說き惡見の論によつて一切誠ならず一切をかへり見ず、岸より身をなげて自ら殺したるもの此地獄に落る也。又異所あり畏鷲所と名づく、獄卒ども大きにいかつて黑金子の杖を振り上げ急に打つて夜晝走り廻り或は火炎の黑金子の刀をひらめかし或は黑金子のほのうの弓を引き箭をつがへて後より追かけつめて、こと〳〵きりさん〳〵に射る昔物を貪る故に人を殺し人を縛りて食をうばいしもの此地獄に落る也。

第三　衆合地獄の事

三つには衆合地獄と云ふ黑繩地獄の下にあり堅横前に同ト此地獄に黑金子の山多くあり其山何れもあひ向ひたり牛頭馬頭等の諸々の獄卒ども鐵杖鐵棒さすまたいろ〳〵の責道具を持つて罪人を狩廻してかの山の間に追ひ入れば二つの山せまりよりて合せおすに、身体ひしげくだけて流るゝ血は地に滿てり。或は黑金子の山空より落ちて罪人を打くだく事砂の如し或は石の上に置きて岩を以て之を押、或は黑金子の臼に入れて、くろ金子の杵を以て扣き極惡の獄の鬼並に熱鐵の獅子、虎狼等の諸々の獸物鳥鷲等の鳥競ひ來りて是を喰ふ。又黑金子の炎の口箸ある鷲其の腸をつかみ去

り木の枝にかけをきて是を喰ふ。又大きなる江の中に黑金子の釣張ありしが皆悉く火にもゆる也獄卒罪人を捕へて彼の川の中になげて、黑金子の釣張の上に落す又江の中に熱き銅の汁みち〳〵て彼の罪人を漂して或は其身日の初めて出る樣なるものもあり或は沈み入る事重き石の如くなるものもあり手を上げて天に向ひよばはり、なくものもあり相共に近きてなき悲しむ者もあり。久敷太苦を受てつかさどる者もなく救ふものもなし、又獄卒地獄の人をこらへ來りて刀葉林の中に置きける此林のこずへをはるかに見上ぐれば容顏美麗にして裝ひかざりたる女房あり。げにも昔こひしかりし人なり嬉しやとて其儘木に昇れば枝も木の葉も皆釵にて身を切りさき骨をこをし筋を絶つこわそも恐しきこと思ひながらも業に引かれて猶こひしく釵をしのぎてこずゑに上り彼の女房を見れば又地にありて、なつかしげに媚をふくめる、目もとにて木の上なる罪人を見て云ひけるは吾汝を思ふ業により此處に來りたり、汝今何とて吾に近づかざるや如何に契をこめざるやこ。木の元になまめきたてり男愈々愛念盛んにして又木のうへよりおるゝ時釵の木の葉は上にむかいて、又一身を普くきりやぶり突き連ぬかれて、既に地に至れば彼の女房亦枝にあり男こがれもだへて又木に上る斯くの如くにする事無量百千億歲なり自ら心にたぶらかされて、彼の地獄の中にして斯く苦しみを受くる事邪慾を因とする也。獄卒罪人を呵嘖して偈をこいて曰く。異なる人の惡を作りて、こことなる人の苦のむくひこ受くるにはあらず。自らの業にて自ら果を得るなり衆生皆斯く

の如し人間の二百才を夜魔天の一日一夜として壽命二千才也。又夜魔天の壽命を此地獄の一日一夜として壽命二千才也。殺生論盗邪婬のもの此地獄に落る也、此大地獄に又十六の別所の地獄あり、其の中に一處あり惡見所と名づくる地獄あり。他人の兒子を强逼て邪行を侵して呼はりなかしめたるもの今處に落ちて苦を受くるなり。罪人自らがちごを見ればちごく此の中にありしが獄卒黑金子杖或は黑金子の錐を持て其ちごの陰の中を差し或は黑金子の打鍵を以て其の陰の中に引かくる。既に我が子の斯く苦を受くるを見て愛の心しきりにして。悲しみもだへて堪へ忍ぶべからず然れ共此愛心の苦は自ら火に燒かるゝ苦に比ぶれば未だ十六分の一つにも及ばず愛心の苦にせめられて終りて又我身の苦を受くるなり。まづ獄卒

此の者をさかさまになし銅を湯に沸かして、糞門にそゝげば身の内に流れ入り普く五臟六腑を燒きて、口鼻より流れ出る也。右の愛心の苦と身心二つの苦を受る事無量百千年のうちにやまず。又多苦惱所と云ふ別所ありて男が男に愛着して邪行を犯したるもの此處に落ちて苦を受ける昔の男子を見れば其身こと〴〵く熱き炎にてちかづき來りていだきつゝ。此男身体みなやかれてとけちり死し終りて。又生かへり大きに恐しくして走り逃げ去りて礖しき岸より落ちけるを。炎の口ばしある烏炎の口ある狐これを食ふ。又忍苦所と云ふ別所の地獄あり他人の女房をぬすみ、犯せるもの此處に落ちて苦を受くるなり獄卒罪人を捕へて、木の末にさかさまにかけをく其の下に火炎盛んにもへて一身をこと〴〵く燒きつくして又生じ

又前の如く妙火にやかれ、さけばんとして口をひらけば猛火口より入りて五臓六腑を燒く斯の如く苦を受くる事無量千才にもまぬがれず此外は經に說き給ふが如し

第四　叫喚地獄の事

四つには叫喚地獄と云ふは衆合地獄の下にあり。縱横前に同ト獄卒の頭黃なる事黃金の如く。眼の中より火出ず赤色の衣を着て手足太く、たくましくして長く疾はしる事風の如し。口よりわるくすさまじき聲を出して其のいきざし強くして罪人を射倒す事矢の如し。罪人おじ恐れて頭をたゝいてあわれみをもとめ願わくば御慈悲をたれ玉ふて、しばしの間免しをかれよと雖も愈々怒を增して鐵棒を以て頭を打て熱鐵の地の上を走らしめ或は熱き燒棚に置きて打返へし〳〵是をあぶり、或は熱き鍋の中に投げ入れて是を煑る、或は猛き炎の滿々たる鐵の室に追ひ入れ、或は金箸を以て口を開きて銅の湯を流し入れば五臓を燒きただらかして直ぐに下より出る也。罪人偈を說いて閻魔王を痛く恨て云へらく御司人何ぞ悲みの心ましまさずや。如何に靜かにわたり給はざるや。我は悲みの器也我に於て何んぞ御慈悲をばましまさずやと、其時に閻魔王答へて云へらく、おのれと愛の網にたぶらかされ惡業を作りて今惡業のむくひを受ける也。何とて我をいかりうらむるや、又曰く汝婆婆に於て慾心と愚知の心に已れとたぶらかされて惡業を作りたり。其の時に何ぞ兼て悔ざりし今悔ゆる共早

や叫わん（正法念經のこゝろをとる）人間の四百才を都卒天の一日一夜として壽命四千才也。又都卒天の命を此地獄の一日一夜として壽命四千才也

殺生偸盜邪淫飲酒のもの此地獄に落つる也又別所の地獄十六あり。其の中に火末虫となづけたる地獄あり。昔酒を賣りしに水を加へたるもの此處に落ちて四百四病を悉く一身に備へたり。其の一つの病のちから一日一夜の間に四大州の人皆死なしめん程の強き病也。身より虫出でて其の皮肉骨髓を飲み食ふ。又一つの別所を雲火霧となづく。昔酒を人に強ひ醉はして惡しくたわむれまさぐりて其人を恥しめたるもの茲に落て苦を受く。獄の火の滿ること厚さ二百尋也、獄卒罪人を捕へて其の火の中に行かしむれば足より頭に至る迄で、悉く消へ失せて形も無きかと思へば獄卒活々と唱へて、是れをあぐれば又元の如くに生きかへる又始めの如くに火の中に行かしむ。斯くの如く無量百千万才を經て苦を受くる事止まず。此外の別所は經の文の如く、又獄卒罪人を呵嘖して偈を說きて曰く、佛の處に於て、うたがいを起し世間出世の作法を破り偈脫のたねを燒く事火の如くなるは酒のいはれなり。（正法念經の心をとる）

第五　大叫喚地獄の事

五つには大叫喚地獄と云ふ叫喚地獄の下にありて縱横前に同じ苦のさまも前に同じ、但し前の四つの地獄、ならびに其れ〴〵の十六の別所の一切の諸々の苦を十層倍重く受くるなり。人間の八百歲を化樂天の一日一夜とし

て其の命八千歳なり。又化樂天の命を此地獄の一日一夜として命八千歳なり。殺生偸盜邪淫飲酒妄語の者此地獄に落つ。獄卒罪人を呵嘖して偈を說きて、云へらく妄語は第一の火なればよく大海をも燒なり況んや其妄語の人を燒く事枯れたる草木薪木を燒くが如し。又十六の別所あり其の中の一處を受鋒苦と名づく熱鐵の針を以て罪人の口と舌とを一つに刺し連きて啼き叫ぶ事もならざる也。又一所を受獘邊苦と名けしが獄卒鐵の鋏を以て其の舌を拔き出す拔き終れば又後より生へける。生ゆれば又是れを拔く兩眼をぬく事も亦舌をぬく如し、又刀を以て其身を切る事ひまなし。其刀のするどき事鉄石もたまらず。況んや肉身をやかくの如く種々無量の苦を受くる事皆是れ妄語の報ひなり此外經に說き給ふ如し。（正法念經略抄の心をとる）

第六　焦熱地獄の事

六つに焦熱地獄と云ふは大叫喚地獄の下にあり。縱横前に同じ獄卒罪人を捕へて熱鉄の地の上に延べ伏せて。或はあをのけ、或はうつ伏せて頭より足に至る迄。或は打ち、或は筑て、しゝむらの團子の如くにする也。或は極めて熱き大きなる黑鉄の燒だなの上に置きて。たけき炎にて是をあぶる右左に之れを轉ばし裏表に燒きくすがらす。或は大きなる黑金子の串を以て下より是を連ぬきて頭まで突き通し押出して打返し〳〵。能くあぶりて。彼の罪人の五臟六腑百のふしゞ〳〵目鼻口の中まで悉く炎を起らしむ或は大熱の鼎に入れて豆を煮る如くに。をごらしめ或は黑金子の櫓に上

げおきて四方より黒金子の火猛くさかんにして骨髄に通る（瑜伽論と大論この心をとる）若し此地獄の火を螢程閻浮提に置かば一時の間に焼き盡しなん況んや罪人の身の和かなることを萌出した草の如くなるを。ここしなへに焼きもやす何んとて忍ぶべきや。此地獄の人は前の五つの地獄の火を望み見て雪霜の如しと。うらやましく思ふなり（正法念經の心を取る）

人間の千六百歳を他化自在天の一日一夜として其命一万六千歳也。又他化自在天の壽の間を此の地獄の一日一夜として壽命一万六千歳也。殺生偸盗邪婬飲酒妄語邪見の者此地獄に落つる也。四方の門の外に又十六の別所あり。其の中の一所を分荼離迦と名づく罪人の一身の内に芥子程も火焔にもあざる處なし。皆地獄の人斯くの如くに説いて曰く汝悪く速に

来れ〳〵茲に分荼離迦の池あり。水有て飲べし林にうるをへる蔭あり罪人此ことばに從ひて走り赴くに道の邊に穴ありて入りければ穴の中に盛なる火滿々て一身百骸皆悪く焼盡ぬる。あか有りて又生て又焼て水のほしさ止ざれば即ち先へ進み行きて彼の所に入りければ分荼離迦の炎にもゆること高さ五百由旬也。其火に焼け死して又活きけりあかありて又始めの如くにぞしける是はもし人自ら餓死して天上に生れん事を願ひ、又他人に教へてかゝる邪見に住せしめたるもの此地獄に落る也。又闇火風と名けし別所あり。かの罪人悪風に吹かれ虚空の中にありて寄り附く處なく車輪の如くにこく轉び廻りて目に見ゆる事なし。かよふに廻り〳〵て、又ここなる刀風たちていさでの如くに身を砕き十方に分れちり散り盡して又生じ

生じて又散けるところしなへに斯有て止む事なし。是はもし人思へるは一切の諸法は常と無常と二つあり無常と云ふは身なり常と云ふは四大なりとかゝる邪見の人かゝる苦を受るなり（正法念經の心をとる）怠なるものも是れをあんずるに此人空理を見あやまりて四大は本地水火風にして常なり此身は四大を本にかへしぬれば、命終りて無常也只空々として異事なしと思へり況んや諸法實相の旨と陰陽四大の離合の間に元来妙理ある事を知らんや凡そ世間の僧俗まなびしも學ばざるも其智人に優れたりと雖も未だ實理を樂しむ程に知らざれば此見にことならざる人多し。最も悲しむべきものかな三教を廣く見ると雖も唯口耳の學なれば言葉は花やかに辯を好みずから向上に覺えて置く深き理を知りたるかをなれども隱し置く心底はなすところ賴しむ處を能くみれば夫いづくんぞかくさんや。然りと雖も誠僞の間を容易くは知りがたし。かゝる人は佛種を燒き聖城を遠ざかるのみならず、大細等しく修因感果の理ならず然なり伏て請らくは我見を改め誠の學にあゆみを進めて常に憂をいだきて、終に常にたのしみ貧富貴賤憂喜にもかつてまたあづからざる本然の理をよく知りてかゝる邪見に住せず諸々の地獄を恐れ不退のうてなに願ふべきものをや。

第七　大焦熱地獄の事

七つには大焦熱地獄と云ふ。焦熱地獄の下にあり縱横前に同じ苦の相もまた同じ（大論瑜伽論）但し前の六つの根本の地獄と又其別所の地獄との一

切の諸々の苦を十増倍宛重く受くる也。つぶさには説くべからず。其の命半中劫なり。殺生偸盗邪婬妄語邪見並に清浄の戒を保ちたる尼を汚したるもの此地獄に落つる也。此悪業の人まづ中有にして大地獄の有様を見るに獄卒あり其面のきつそうすさまじく。手足極熱にして身を。もごらかし肱をいからす罪人之を見て大きに恐る是を聞て愈々怖恐れ其手に利刀ひらめかし。腹は大きにして黒雲の色の如く眼の光は火炎の如く曲りたる牙は鋒先の如くにするごくして臂手皆長く節たちて勢を爲すときは凡て一身あらかにて恐ろしき事心も消ゆる如くなり。罪人を捕へて咽を堅く縛りて引立て六千八百千由旬の地の中海の底を過ぎさりて、又海の外より三十六億由旬を行きさりて漸々に下にむかひて下る事十億由旬なり。一切の風の中には業の風第一なり斯の如くに業の風悪業の人を引いざりてかの所に至る既に彼處に行き付けば閻魔王種々さま〴〵に呵嘖し給ふ。扨其の後悪業の縄を以て縛りて引出して地獄に向ひ行かしむ、未だ遠くより大焦熱地獄のをびたゞしく炎もゆるを見て、又罪人の啼さけぶ聲を聞きてかなしみ憂ひたましい恐る漸々近きて無量の苦を受るを見るに斯の如くにして無量百千万億才を經ると云ふを聞きて始め啼きさけぶ聲計りを聞て恐しきより十増倍恐しく魂消ゆる如く心驚きて怖け各々其時獄卒此罪人を呵嘖して曰く汝地獄の聲を聞き目に見てさへ斯く怖恐るゝや如何に況んや地獄にて、其身を直きに行かれむ事枯たる草薪を焼く如し。但し火のやくは是火のやくにあらず。即ち是悪業のやく也。火の焼をば卽ち滅す

べし業のやくをば、消すべからずと云へり斯の如く懇ろに呵嘖して、扨引いで地獄に向ふに大きなる火聚あり、其の火聚あがりて高き事五百由旬、其廣さ二百由旬なり。炎のもゆる事盛にして彼の人つくりし所の惡業の勢力が急に其身をなげて彼の火聚に落す事大山の岸よりおして磯しき岸に落す如し（已上正法念經略抄の心をとる）此大焦熱地獄の四方の門の外に十六の別所あり。其中の一處は炎のもゆる事一切のところ間なり乃至虛空までもゑ悉皆針のみっづ程も、炎のもゑざる所なし罪人共火の中にて、うらめしげに聲をあげ無量億才經るとても。永へに燒けやまずと唱へて、さけぶ計りなり。是は清淨潔齊の優婆夷を犯したるもの此地獄に落る也。又一つの別所をば普受一切苦惱とぞ名ける炎の刀を拔き持て身の皮を殘らず面足手まで。はぎさきて身のしゝむらをば切らずして其の皮を身と連ね。熱地の上に敷き置きて火を以て是を燒き或は沸きかへりたる熱鉄を注ぎける。かやうに無量億千才大苦惱を受くる也。是は出家の戒を道として、保ちし女房を酒を以てたぶらかし其の心を能くやぶり。共に婬慾を行ひ或は寶を與へしもの此地獄に落る也。殘りの別所は經中に說き給ふ如くなり。（正法念經畧抄の心なり）

第八　阿鼻地獄の事

八つに阿鼻地獄と云ふは即ち、無間地獄なり。大焦熱地獄の下にあり。慾界のはての底なり。罪人此阿鼻地獄に趣き向ふときに、先中有の位にて啼

き愁みて偈を説て曰く一切は只火炎也虚空にも普く絶へ間無く四角八方大地にも炎ならざる處なし、一切の地には悪人みな滿々て我がより附かん處なく。孤の如くに唯一人にて友もなし闇き悪處の中に有り。大火炎のほのむらに居る虚空のうちにて、家また日月の光りを見ずと云へり其時獄卒大きに怒れるけしきにて云ひけるは或は僧刧或は滅刧より大火汝が身をやけり。愚なる人かな既に悪を作りて今更何んとて悔ゆるぞや。是天の修羅健達婆龍鬼にも、あらばこそ汝が作りし業の網にかゝりたり他人の知らざる業なれば、他人又能く汝をすくわめや。汝又愚なり中有のくるしみありとても汝が終に落ぬべき阿鼻地獄の苦にくらぶれば。例へば大海の其中にて一とすくひの水の如し今の苦は一とすくひの水也後の苦は大海の水の如しとなん叫嘖して其れより地獄へ引ゐて向ひさる事。二万五千由旬にして。彼の阿鼻地獄の罪人の啼きさけぶ聲を聞き獄卒の呵嘖の通り十増倍。恐しく魂も消々にて夢の中の如くなり。さかさまになりて二千年を經て皆下に向い行く（正法念經畧抄のこゝろ）彼の阿鼻地獄のかつこうは縦横八万由旬也。七重の黒金子の城に七重の黒金子の網あり城の下に十八のへだてあり城のまわりにはつるぎの林ひつしとあり。四つの隅には銅の犬四つあり身の丈四十由旬なり眼はいなびかり牙は釵。齒はつるぎの山舌は黒金子のうばらの如し。一切の毛穴より猛火をぞ出しける其煙嗅くして世間に例へるものも無し十八人の獄卒の頭は羅刹にさも似たり口は夜刃の如くなり六十四の眼よりは黒金子の玉ほとばしり。曲りし牙上

へ四由旬高くして牙の先より火を流し合城にぞ滿ちにける。頭の上に八つの牛の頭あり一々かしらに又皆十八の角ありて其の角の先よりも猛火をぞ出しける。又七重の城内に黑金子幢七つあり。其のはたほこのさきよりも火のをごり出る事泉の湧き立つ如くにて、炎流れてほとばしり。又城内にみちにけり。四方の門の傍りには、八十の釜よりも銅の湯湧き出て又城内に滿にけり彼の一々のへだての間に八万四千の黑金子の蜂と大蛇ありけるが毒を吐き火々吐きて其の身は城にはびこりたり。其蛇のほゆるこゑは唯百千のいかづちの鳴り渉るが如くなり。大きなる黑金子の玉はあられの降る如く城の内にぞ滿にける五百億の虫ありて八万四千のくちばしより火の流れ落る事雨の降しく如くなり。此虫の下るとき獄の火愈々盛になり八万四千由旬まで普く照し渡りけり。又八万億千の苦の中の苦なるもの此地獄に集まりたり。（觀佛三昧經の略抄の心）瑜伽論の第四の巻に云ひけるは、東方多百瑜繕那の三熱の大鉄地に猛く盛なりし。火ありしが炎を上げて飛び來り彼の諸々の有情をさし。皮をうがち肉に入れ筋をたち骨碎けて髓に通りて是をやく。枯し薪に油をうち風を待つて火をつけし如くに一身悉く猛き炎にもえにけり、東方より來るのみならず、南方西方北方も又斯くの如く也。されば四方よりくる炎と諸々の有情ども火花をちらし交りて莫大のほむらとぞ成りにける。四方上下にみち〳〵て少しも間なかりけり苦痛を受る事も又しばらくも間なし。然る故に罪人は數限り無けれ共互に見る事ならずして只苦にせめられて呼はりさけぶ聲

を聞く衆生ありとは知れるなり。又黒金子の箕を以て三熱の黒金子の炭をもりみて簸揃へて又熱鉄の地に置きて大熱鉄山に昇らしむ、昇りては又下り下りては又昇る又其の口の中よりも舌を長く抜き出し百の金釘打廻し牛の皮張る如く間も無く張り付けて又更に熱鐵の地の上にあをのきにのべふさせて熱鐵の金箸にて口をはさみ開せて三熱の黒金子の丸がせを入れ置けば口も咽も焼き抜きて臓腑に通り下より出ず、又赤銅を沸し立て其の口に入るゝさき腹中に流れ入り腑臓腸胃を焼き抜きて下より流れ出る也。(已上瑜伽論のこゝろなり)三熱と云ふは(焼燃極焼燃遍極焼燃)也。此阿鼻地獄の大苦患は前の七つの大地獄並に別所の一切諸々の苦を以て只一つにうち合せて千増倍重きなり。余りに苦のふ強き故此地獄の罪人は大焦熱地獄を見て他化自在天のたのしみを見る如くにぞうらやみける。若し四天下の其の内や慾界六慾天の者地獄の臭きをかぐならば。諸々の有情悉く命もきへて盡ぬべし。故に如何と云ふならば、諸々の地獄の人極めて悪く臭きなり。又其の臭きは何んとして來らざるぞ。と云ふならば出山設山と名付たる二つの大山へだたりて、彼の臭きをさへぎりたり。又もし人一切の地獄のあらゆる苦のふを聞かん時、皆聞くに耐へざらん。若し耐へて聞くならば、即ち命消ぬべし如何に況んや阿鼻地獄八千に分けて一つをも説き給はずと宣へり。故に又如何んと云ふならば説き盡す事あるべからず。聞く事をも得べからず。例ふべからざればなり。若し説き盡す人ありて聞き盡す人あらば忽ち血を吐き死なんとなり(正法念經畧抄

の心なり）此無間地獄は命一中刧なり。（具舍論の心）五逆罪を作り因果の道理をうち笑ひなきものゝと思ひきり大乘の法をそしり四重のとがを犯し信施を空しく食するもの此地獄に落つるなり。（觀佛三昧經の心）此無間地獄四方の門の外に又十六の眷屬の別所あり。其の中の一處を鐵野干食所と名づけて罪人の身の上に火のもゆる事十由旬計りなり。諸々の地獄中にて此苦しみ最もすぐれたり。又黑金子の瓦を降らす事盛んなるゆふだちの如くにて身を破り骨を碎く事かれたる脯にさも似たり。炎の牙ある狐ども常に來りて喰ひけり。斯の如く苦を受て永しなへに止む時なし。昔堂俗伽藍に火をかけて佛像をやき僧房を燒き僧の寢道具を燒きしもの、此地獄に落る也。又別所あり黑肚所とぞ名けゝる飢かわく事たへがたく、其の身を燒き焦す故により我が肉むらを喰ひけり。喰ひ盡して消ゆると思へば、又生きかへり又喰へり、又肚の黑き蛇あり。彼の罪人をまづひつゝ。先づ足の甲より食み漸々に齧み喰へり。或は猛火に入りて燒き焦され或は大釜に投入れて是を煎り之を煮る骨ゐゝむらのごくる事、春の氷の如くにてやう〳〵又焚く火と共に猛火となる。斯の如く種々無量の苦を受て無量億歲を經にけり。是は昔佛の財物を取り用ゐて食としたるもの此中に落るなり。又別所あり雨山聚所と名づけて一由旬計りの黑鐵の山の上より下りて罪人を打ひしぎ碎くる事みじんの如し。然ありて又生又碎けぬ又十一の炎ありて普く廻り圍み身を燒きけり。又獄卒刀を以て身の內を普く切りさきて極熱のなまりをさげたる所へ鑄こみけり。又四百四病を悉く具足し

たり斯の如く苦を受る事何億歳と云ふ限りなし。昔碎支佛の食を取て自ら喰つて與へざるもの此處に落るなり。又別所有闍婆度所と名ける此地獄に闍婆と云ふ惡鳥あり。其の身大なる事象の如し。此背つるぎの如くにして、又炎を出しける罪人を引つかんで虚空はるかにはねつけて去る東西にまひ遊び其の後はなちて蹴おとしけり。其勢強くして大石の落るが如し。其の身碎けて百千となり。又合ひ合ふて生き歸り。又つかみて上りける茂りたる草の如くにて其の足臂を切りさき、又炎の齒ある狗來りて是をかみ喰ひけり。斯の如く苦惱を受て止む事なし。昔例へば人を此ものをばかくせんとさだめて渴死にあわしめたるもの此地獄に落るなり。此殘りは經說の如し。（已上正法念經の心あり）瑜伽論の四の卷に八大地獄の

近きほとりの別所をおしなべて說て曰く、かの一切もろ〳〵の大那落迦に皆四方に四川のきし四つの門あり。黑鐵の垣かこひ廻り出るきびしき事ゆびも入らざりけり。四方の四つの門より出れば一々の門の外に四つ園生あり。其園生に埋火有て膝にひとし。彼の諸々の有情出て宿りを求めんとて尋ね遊び行くまゝに、此のかくし火の元に來て足を下せば、其儘に足のゝむら筋骨まで皆悉くたゞれ消へ、足を上ぐれば又生ず。此埋火に合ひ續きて間なく屍糞泥ぞありける。此諸々の有情ごもやどりを求めん。其爲に埋火の元を立出て漸う尋ね行く程に屍糞泥の中に入り、頭も足もおぼれけりあまつさへ其中に嬢矩吒と云へる虫あまた滿々てありけるが、皮をうがち肉に入り筋をたち切り骨に入り髓をとりてぞ喰ひける。又屍糞泥に打

つゞきて間なく利刀つるぎの刃をあをのけて道となす。彼の諸々の有情ども宿りを求めあるきつゝ、此所に遊び來て足を下せばたちまちに皮肉筋血悉く切れたゞれなくなりて足を上ぐれば、元の如し。又つるぎの道に打續きて間なく刃の林あり彼の諸々の有情ども宿りを求めて尋ね行き林のかげに赴きてしばしやすらふ其の内ににわかに風はげしくして鈒の葉を吹き落し、身の節々を切りさきて、既に地に倒るれば黑犬あまた群がりて百の骸をつかみさき引ずり廻して喰ひけり。鈒の林に打つゞきて間もなく黑鐵の茨生ひ鋒の如くなる。梨の林の有けるが、彼の諸々の有情ども宿りを求めん其の爲に即ち來り赴き終に其の木に昇るとき茨の鋒さかさまに下にむかいてさし連ぬき下りなんとせし時に、又茨の鋒は上に向ひて突き通す。其時に鐵の觜のある大烏首の上に飛び上り、或は肩に上り居て目の玉を抜き喰ふ。茨の林の元よりも間もなく打續き大きに廣き川有りて沸きかへる水熱き灰其の中に滿はびこり。彼の諸々の有情ども宿りを尋ね求めつゝ彼處より來りつゝ、此川にこそ落にけり。大釜に豆を入れ烈しき火にて能く燒きて煮たり。煎りたりする如く。湯の沸き上るに從ひて普く廻りかへりけり。又いかめしく恐ろしきは河のあなたこなたには獄卒あまた有けるが、突棒刺又縛繩大網をかまへつゝ。彼の有情をさへぎりて、此河を逃げ出ん事蟷螂が斧とかや。猿猴が月に合ひ同じ或は繩を首にかけあるひは網にてすくひとり、大熱鐵の地の上に有情どもを、あをのけて糺明をぞしたりける。汝等此度何の爲にかゝるわざをばなし

けるぞ有様に申すべしと鐵棒にてしたゝかにすねをひしぎて問ひければ彼の有情其時に苦しげなる聲色にて答へける。我等元より愚にて飢につられしためなりこそ申しける。其の時に獄卒黑鐵の金箸を以て口をさき開かせて極めて燒き赤めたる黑鐵のまるがせを口の中にぞ入ける。又異なる有情の申しけるは我は唯湯水にかわきし故なりと、其の時獄卒銅の湯を以て其の口に流し込むかゝる無量の苦しみを永なへに受るなり。乃至前きの世に作りたる惡業。ならくの苦しみをよく感ず。惡業未だ盡きざれば此の內を出でざるなり右の如く釵の道釵の林黑鐵の茨の林などを集めて一つとして一つの地獄の四つの門の外に有りかるが故に四つの園生有り。（已上瑜伽論並に俱舍論の心なり一々の地獄四つの外に各の四つ園生有り合せて十六とする也正法念經の八大地獄十六の別所各のめん〳〵なることは同じからず）又額部陀等の八寒地獄有り委しくは經論の如し是を述るいとまなし。

往生要集上之卷終

昭和十五年二月二十五日印刷納本
昭和十五年三月一日發行

惠心僧都著述

發行人　下關市大字豐浦町金屋　林照之進

印刷所　下關市東大坪町二七四　下關刑務支所

印刷人　下關市東大坪町二七四　海田信行

發行所　下關市大字豐浦町金屋　正林堂書房

【往生要集奥附】

401
130

終